

『中原音韻』の成書過程

遠 藤 光 暁

1. は じ め に

周徳清 (1277—1365⁽¹⁾) の『中原音韻』⁽²⁾ は近世音研究の出発点となる最も基本的な資料である。その体裁は従来の因襲的な韻書が切韻系韻書の枠組みを基本的に踏襲するのとは異なり、平上去入で分卷せず、韻部を大幅に合併・調整し、平声を陰陽に区分し、入声を三声に派入し、当時の現実の発音を正面から反映させようとした革新的なものであった。

その成書の経緯について、周徳清は自序で次のように書いている：「…泰定甲子、存存託友張漢英以其説、問作詞之法於予。予曰：「言語一科。欲作樂府，必正言語。欲正言語，必宗中原之音。樂府之盛、之備、之難，莫如今時。其盛則自搢紳及閭閻、歌詠者衆。其備則自閔・鄭・白・馬一新製作，韻共守自然之音，字能通天下之語，字暢語俊，韻促音調。…惜無有以訓之者。予甚欲為訂砭之文，以正其語便其作而使成樂府。恐起爭端，矧為人之學乎。因重張之請，遂分平声陰陽，及撮其三声同音，兼以入声派入三声，如鞞字，次本声後，葺成一帙，分為十九，名之曰『中原音韻』，并起例以遺之，可與識者道是。」⁽³⁾すなわち、泰定甲子 [1324年] に青原 [江西・吉安] の蕭存存が張漢英を介して作詞の方法を尋ねてきたのに答え、中原の音によって言語を正すべきことを述べたが、そのことを教える者がいないため、自ら入声を平上去の三声に派入し、平声の陰陽を区別し、『中原音韻』十九韻および「起例」をまとめた

という。

また「中原音韻正語作詞起例」（以下「起例」と略称）第4条には「平上去入四声、『音韻』無入声，派入平上去三声，前輩佳作中間備載明白，但未有以集之者。今撮其同声。或有未当，与我同志改而正諸。」⁽⁴⁾とあり，入派三声は元曲の作品には明瞭に現れているのだが未だそれを集成した者がいないので自分が摘記する，と言っている。

以上の記載をそのまま信ずるならば，周徳清は『中原音韻』を関漢卿・鄭光祖・白樸・馬致遠などの初期の元曲作家の実作に基づいて帰納的に編んだこととなる。だが，『中原音韻』の一稿本と目される燕山・卓從之述『中州楽府音韻類編』の構成を仔細に検討することにより，それとは全く異なる成書過程が浮かび上がってくる。そしてそのことは『中原音韻』を音韻資料として扱うに際しても根本的な再検討を迫るものである。以下でそれをつぶさに見ていこう。

2. 『中原音韻』と『中州楽府音韻類編』の関係

周徳清『中原音韻』（以下「周本」と呼ぶ）と卓從之述『中州楽府音韻類編』（以下「卓本」と呼ぶ）の関係については諸説がある。

趙蔭棠は，卓本には平声に「陰」「陽」の他「陰陽」の類があって周徳清の「起例」に言うところの「墨本」と一致することと，韻書は後に出たものほど字数が多くなるが周本が5876字収めるのに対し卓本が4094字に過ぎないことから，卓本は周徳清の未定稿に基づいたものであると論じた⁽⁵⁾。

羅常培は「在《中原音韻》成書後二十七年——元至正辛卯（1351）——燕山卓從之又作了一部《中州楽府音韻類編》，他所分的十九部只把周書的歌戈改作哥戈，侵尋改作尋侵；又把平声的“陰”“陽”分作“陰字”、“陽字”、“陰陽字”三類；大体上看起来，總算是周規卓隨，沒有顯著的差異。」と述べたが⁽⁶⁾，この1351年というのは今見られる卓本を収める『朝野新声太平楽府』の成書年であって，卓本の成書年の下限に過ぎず，これだけから周本と卓本の先後

関係を決定することはできない。

陸志韋の「釈中原音韻」の附説「周氏中原音韻跟卓氏中州楽府音韻類編の関係」は特にこの問題を詳論したものである⁽⁷⁾。その所説は：まず、周本が江西で1324年に著され1333年以降に刊行されてから⁽⁸⁾燕山の卓從之がそれを改訂し1351年に四川の楊朝英の『朝野新声太平楽府』に収められるというのは元代にあっては困難であっただろうから不自然である；また卓本は周本より千字以上少ないが、その中にはごく常用の字が多く含まれているから卓本がわざわざ削除したことは断じてあり得ない；だが小韻内の字の配列順などからして両書は同じ源に遡るに違いない、として結局14世紀以前に既に北曲のための韻書が存在したものと想定した。

佐々木猛「『中州楽府音韻類編』によって『中原音韻』に含まれる誤りを正しうるか」⁽⁹⁾は、卓本が平声で「陰陽」類を立てることの他、小韻の間を空白で隔てる点（周本は○で隔てる）や「屋」の字を去声の「誤」と同音とする点（周本は「屋」を「沃兀」と共に「入声作上声」の欄に配する）でむしろ「起例」の記載（第11条「『音韻』内、每空是一音。…」、第18条「入声作三声，如平声伏与扶、上声拂与斧、去声屋与誤之類，俱同声則不可。」）と合うことに着目し、「このように『中州楽府音韻類編』の体例は周德清自身が記した語とよく一致し、彼のいわゆる「墨本（稿本）」と極めて密接な関係にあると考えられる。恐らく『中州楽府音韻類編』、或いはその別本に基づいて『中原音韻』が編まれたのであろう…」と述べた（1524頁）。この論文の主眼は更に卓本との比較を通して周德清が『中原音韻』を編纂する際に犯した誤りを校正することにより、具体例を多く挙げている。また、『中原音韻』が一字のみから成る小韻を韻末に移すという原則も指摘する（1528頁）。この説は周本と卓本の全体を逐一比較した上で提出されており、前掲の三家が刊行年や総字数の多寡といった外面的な根拠に基づくのとは全く質的に異なる本格的なものである。

寧継福の「論《中州楽府音韻類編》与《中原音韻》的关系」⁽¹⁰⁾も同様に両書をつぶさに比較したもののだが、結論は正反対になっている。

る。第1に卓本の「収」という注を取り上げ、周徳清が何も表示せずに収めた来源の異なる字に対して卓従之が改めて注記を施したものと解する。第2に平声の「陰陽」は卓従之が陰・陽でミニマルペアーをなす小韻を集めて改めて立てた類であると見なす。第3に卓本の方が周本よりも1700字余り少ない点は、現行の卓本が誤脱の多い本であることにより説明する。ほか両書の細かな差異も列挙するが、結局のところ卓本は周本の修訂本であると結論づける。寧氏の論は先に周徳清を曲韻の祖とする定見があって、そこから全てを解釈しようとしているかの如くである。

では真相は如何なるものであったか。ここではひとまず諸説を御破算にし、先入観を排して事実そのものから出発することとしよう。

3. 周本と卓本の比較例——東鍾韻——

まず皮切りに冒頭の東鍾韻につき周本と卓本を比較する。卓本も註2所引の中華書局影印本を用いるが、佐々木猛「卓従之『中州楽府音韻類編』考訂本」⁽¹¹⁾の方が優れた校本であり、随時参照する⁽¹²⁾。

ここでは卓本を基準にして小韻順・字序の番号をふるが、これは便宜的な措置に過ぎず、周本を基準にして番号をふっても得られる結論は同様である。小韻順は各声調ごとにアラビア数字で表示し、卓本における「陰陽」の類の小韻は周本の欄では例えば「Y1」「Y2」のようにして区別する。周本のみに存在する小韻はイロハで表示する。また、小韻内の字序が卓本と周本とで異なる場合、卓本の側を基準にしてabc…という番号をつけ、周本の側に異同を表示する。一方の本のみに見られる字は下に波線をつけて表示する。

	卓本	周本
	平声 陰	平声 陰
1	東 冬	1 東 冬
2	中 衷 忠 終 鍾 鐘	2 鍾 鐘 中 忠 衷 終
3	松 嵩	Y1 通 蕩

- 4 公躬恭弓功工蚣攻宮供肱觥<sup>上二
字取</sup>
- 5 空控<sup>上二
字取</sup>
- 6 翁泓<sup>上二
字取</sup>
- 7 宗稷驥
- 8 鬆惚
- 9 蹤縱<sup>上二
字取</sup>
- 10 崩繃<sup>上二
字取</sup>
- 陽
- 1 戎茸
- 2 龍隆癘隆<sup>上三
字取</sup>
- 3 蒙濛朦盲莨萌<sup>上三
字取</sup>
- 4 籠朧聾隴隴朧朧
- 5 膿農儂
- 6 濃醲穠
- 7 從

陰陽

- 1 通遘
- 2 同童銅桐峒筒瞳潼孳
- 3 冲充衝^{上一字}
- 4 重蟲鱗崇<sup>上一字
方意</sup>
- 5 邕噲雍
- 6 容融溶庸墉鎔蓉榮<sup>上一
字取</sup>
- 7 胸凶兄<sup>上一
字取</sup>
- 8 風楓豐封峯鋒蜂烽
- 9 馮逢縫<sup>上二
字取</sup>
- 10 烘烘轟<sup>上二
字取</sup>
- 11 紅烘虹鴻宏絃嶸橫弘<sup>上五
字取</sup>
- 12 葱匆聰聰
- 13 叢
- 14 蓬蓬<sup>上一
字取</sup>
- 15 烹<sup>上一
字取</sup>
- 16 彭棚鵬<sup>上一
字取</sup>

- 3 松嵩
- Y3 冲充衝春忡揗撞撞种种
- Y5 邕噲雍
- 5 空控
- 7 宗稷驥
- Y8 風楓豐封葑峯鋒蜂^{f h}
- 8 鬆惚
- Y12 匆忽聰聰囟煙突
- 9 蹤縱樅
- 1 穹芎傾
- 4 工功攻公蚣弓躬恭宮龔供肱觥
- Y10 烘烘人聲轟^b
- Y7 凶兎胷洵^a
- 6 翁翕雍離辟壅泓
- 10 崩繃
- Y15 烹

陽

- Y2 同筒銅桐峒童瞳潼孳^{a f g d b g h i}
- 1 戎茂駮絨駘茸
- 2 龍隆癘隆
- 1 窮窮蛩叩筇
- 4 籠朧聾朧朧朧聾^{a b d}
- 5 膿農儂
- 6 濃醲醲
- Y4 重蟲鱗鱗崇
- Y9 馮逢縫
- Y13 叢叢琮
- 口 熊雄
- Y6 容溶蓉鎔瑤庸僦鄺鋪融榮^{f d b}
- 3 蒙濛朦矇盲膏萌
- Y11 紅烘虹鴻宏絃橫嶸弘^{a h g}
- Y14 · Y16 蓬蓬芄^a彭棚鵬
- 7 從

上声

- 1 董 懂
 2 孔 恐
 3 憐 蠓 猛 猛 猛 ^{上三}_{字取}
 4 桶 統
 5 總
 6 汞 噴
 7 捧
 8 寵
 9 簣
 10 隴 壠
 11 腫 腫 種
 12 冗
 13 擁 勇 涌 踊 永 ^{上二}_{字取}
 14 聳
 15 嘜

去声

- 1 送 宋
 2 鳳 奉 諷 縫
 3 貢 共 供
 4 弄 哢 磬
 5 棟 凍 棟 洞 動
 6 控 空 控
 7 訟 頌 誦
 8 瓮 隴
 9 痛 慟
 10 衆 重 中 種 仲
 11 夢 孟 ^{上二}_{字取}
 12 用 詠 瑩 ^{上二}_{字取}
 13 綜
 14 縱 從 粽

上声

- 1 董 懂
 11 腫 腫 種 冢
 2 孔 恐
 4 桶 統
 6 汞 噴
 10 隴 壠
 9 簣 攏
 イ 洵 詢
 14 聳 竦
 口 拱 鞏 琫
 13 勇 擁 涌 踊 桶 永 俑
 3 蠓 懜 猛 猛 猛
 5 總
 7 捧
 8 寵
 12 冗
 15 嘜
 ハ 啞

去声

- 5 洞 動 棟 凍 棟
 2 鳳 奉 諷 縫
 3 貢 共 供
 1 宋 送
 4 弄 哢 磬
 6 控 空 控
 7 訟 誦 頌
 8 甕 隴 鞏
 9 痛 慟
 10 衆 中 仲 重 種
 14 縱 從 粽
 11 夢 孟
 12 用 詠 瑩
 16 哄 閔 橫

15 進収16 横収

13 綜

15 進

イ 銃

以上を通覧すると、卓本は平声に「陰陽」を立てるのに周本にはないとか概ね周本の方が収録字が多いといった相違点はあるものの、収録字およびその字序が全同の小韻もかなり多く、小韻配列順も平声の「陰陽」に関連する部分是对应関係が複雑だが、それ以外は両本の間でかなりの共通性があり、大局的に見ると両者の一致は偶然とは考え難い。このことは他の系統の韻書と少し対比してみれば一層明かとなる。前代の韻書、例えば『広韻』『集韻』『五音集韻』『礼部韻略』『古今韻会举要』『蒙古字韻』など何でもよいが、周本・卓本とは収録字のみについて見てもまるで異なるのである（もちろん周本・卓本に見える字は他の諸韻書も殆ど収録しているが、それぞれの小韻で正にそれだけの字を収める、といった一致は存在しない）。そしてこのような大局的一致は東鍾韻のみならず全書に渡って見られ、陸志韋が両書は同じ源に遡るとしたのも首肯される。

では両書が共通の祖本に遡るとしたら、その祖本は如何なる様相のものであったか。また両者の相違点はどのようにして生じたのであろうか。

まず収録字について検討してみよう。第1に、卓本の側で誤脱したことが明かな小韻が存在する。卓本の「陰陽」の欄は陰平・陽平でミニマル・ペアーをなす小韻を対にして収めたものだが、いま見られる本では第7小韻「胸凶兄」と対になる陽平小韻が欠落している。本来はこの直後の位置に周本には存在する「熊雄」の両字あるいはいずれか1字があったであろう。これ以外の場合、周本の側でのみ見られる字が平声・陰のY3小韻の7字分、平声・陰の第6小韻の5字分、平声・陽の1小韻の4字分がそれぞれ小韻末・中の部分に連続して現れていることから推すと、これらの字は周本の側の増補成分である蓋然性が高いように思われる。何故なら、もしも卓本の側が周本に本来あった僻字を削除したのであれば、残された字は本来の字群から見ればもっとランダムな分布を示すことが期待され

るからである。

また、周本の側にのみ見られる字で散発的に現れるものも声符が同じ字に隣接して（普通は後ろ、時に前に）位置する傾向が見られる。例えば、周本の平声・陰の Y8 小韻の「葇」「丰」，Y12 小韻の「囟」，Y7 小韻の「兗」「洵」，6 小韻の「鞫」等々。すぐ後で見ると、周本は小韻内の字序を諧声系列順にまとめようとする意図が明かであり、それを考え合わせるならば、周本の側でのみ見られる字は殆どが周本の増補成分だとすべきである。もしも逆に卓本がそれらの字を削除したのなら、周本で声符を同じくする字が隣接する現象はこのように系統的には起こり得ないであろう。

小韻内の字序について。上掲の比較表では周本の側に abc…が表示されている 18 の小韻において両本の間に小韻内の字序の異同が見られる。そのうち、次の小韻では周本の側で字序が声符順に揃っている：平声・陰・4 小韻：卓本「公躬恭弓功工蚣攻宮供肱觥」，周本「工功攻公蚣弓躬恭宮龔供肱觥」，声符「工」3 字，「公」2 字，「弓」2 字，「共」3 字（「宮」を除く）の順に揃う。平声・陽・Y2 小韻：卓本「同童銅桐峒筒瞳潼孳」，周本「同筒銅桐峒童僮瞳潼潼孳」，声符「同」5 字，「童」6 字の順に揃う。平声・陽・Y6 小韻：卓本「容融溶庸庸鎔蓉榮」，周本「容溶蓉鎔瑤庸庸鄘鐻壻融榮」，声符「容」5 字，「庸」5 字の順に揃う。去声・10 小韻：卓本「衆重中種仲」，周本「衆中仲重種」，声符「中」2 字，「重」2 字の順に揃う。ほか易識字を冒頭に持ってきた小韻もある：平声・陰・2 小韻：卓本は「中」で始まるが周本は「鍾」で始まる（「中」は両読字で好ましくない）。平声・陰・Y7 小韻：卓本は「胸」で始まるが周本は「凶」で始まる（「凶」の方が簡単な字）。『中原音韻』「起例」第 11 条に『「音韻」内、每空是一音。以易識字為頭，止依頭一字呼吸，更不別立切脚。』とある。以上のような場合、周本の方がより秩序だっており、これらの字序は周本の側が並べ替えたものとすべきである。何故なら字序を入れ換えることは相当の労力を要することであり、今の場合、卓本の側が変更したと仮定してもそれに見合うメリットは見いだされないからである。

次に小韻の配列順について。まず最も顕著なのは、平声において周本が「陰」「陽」の二分類であるのに対し卓本は更に「陰陽」をもつ三分類となっていることであり、小韻順も当然ながらそれに応じてかなりの違いがある。ここで、卓本で「陰陽」となっている諸小韻の周本における出現順を見ると、「陰」では Y1・3・5・8・12・10・7・15の如くなっており、「陽」では Y2・4・9・13・6・11・14+16の如くなっており、Y5とY6およびY7と口の2対の出現が交差するほかは、卓本における「陰陽」の各対が周本の「陰」と「陽」において同じ順番で出てくることは要注意である。もし、周本の方が本来的な形であったとすると、卓本は周本の「陰」なり「陽」なりいずれかの小韻を基準にして他方にある最小対立をなす小韻を拾って「陰陽」欄をつくるであろうから、「陰」なり「陽」なり片方の出現順が一致することは充分期待されるところであるが、もう片方は周本においてもっとランダムな順序になっていてよい筈である。ここからして、この場合は卓本の方が本来の形であり、周本がそれらの対を順次「陰」と「陽」に再配分した蓋然性が高いものと推定される。

また、周本の側では一字のみからなる小韻が各声調の末尾に集中して置かれることも目立った特徴である。平声・陰および陽では1小韻づつしか例がないが、上声では6小韻、去声では3小韻が韻末に連続して配置されている。一方、卓本の側ではそのような制約はなく、一字のみの小韻でも韻内のいずれの位置にも分布する。そして、例数の多い上声について見ると、卓本に存在する一字のみの小韻を順次摘記して韻末に持ってくると周本の如き外観が出来ることが明かであるのに比して、周本の方が本来の状態だと仮定しても、そこから卓本で何故それらがそれぞれ第5・7・8・12・15小韻に挿入されたかを説明することは難しい。

その他の小韻順の違いは散発的なものが多く、周本と卓本の比較だけからはどちらが本来のかを言うことはおおむね困難である。だが、去声で周本が「洞」の小韻を冒頭に置くのは平声・陰の第一小韻「東」および上声の第一小韻「董」と声母を合わせるためである

う。

なお、卓本に見える「収」については次節で検討する。

以上において東鍾韻を例として周本と卓本を比較してきたが、現行の卓本が「雄」または「熊」ないしその両字を含む小韻を脱している他は、おおむね卓本の方が本来的な様相を反映し、周本がそれを増補・改訂したと見なされるケースが多数を占める。ここではつぶさに検討する篇幅がないけれども、これは東鍾韻のみならず全書における様相もほぼ同様なのである。この結論は純粹に周本と卓本の本文の差異のみに基づいて得たものであるが、周德清が『中原音韻』において記載するところを考慮に入れるならば、おおむね卓本が『中原音韻』墨本に相当し、周本が『中原音韻』の本⁽¹³⁾に相当する、という趙蔭棠一佐々木説が妥当なものと判断される。

4. 卓本の成立過程

ここで本題に入り、そもそも『中原音韻』はどのようにして編まれたかを問うこととしよう。

この問題を解くヒントは既に『中原音韻』そのものにあらわな形で与えられている。即ち、「東鍾・江陽・支思・齊微・魚模・皆来・真文・寒山・桓歛・先天・蕭豪・歌戈・家麻・車遮・庚青・尤侯・侵尋・監咸・廉纖」といった韻目用字は多くが『広韻』の韻目と一致し、韻序も『広韻』そのものといってもいい位である。そこで、『中原音韻』は『広韻』のような伝統韻書に基づいて編まれたのではないか、という疑いが生ずる。

この仮説を卓本に即して具体的に検証して見よう。やはり東鍾韻を例とし、左側には卓本収載字を原序の如く列挙し、その右側に『広韻』における出現順を表示する。小韻順は1・2・3…のようにアラビア数字で示し、小韻内の該字の出現順位を a・b・c…のようにアルファベットで示す。例えば「東 1a」は東韻第1小韻第1字を指す。『広韻』は周祖謨校本を取り込んだ沢存堂本を影印した通行の藝文印書館本に拠る。平声の「陰陽」欄は対になる2小韻を横線で区切っておく。

平聲 陰	宗 冬8 a *	隴 〃 v *	崇 東7 a *	東 洋 學 報
東 東1 a	樓 東31 g	櫛 〃 p	上一字方言	
冬 冬1 a	駿 〃 h	璫 〃 u	邕 鍾10 a	
			𪔐 〃 c	
中 東3 a	鬆 冬9 a *	膿 冬4 l *	雍 〃 b *	
衷 〃 b	惚 東35 b	農 冬4 a		
忠 〃 c		儂 〃 j		
終 東5 a	蹤 鍾17 c *		容 鍾6 a *	
鍾 鍾1 a	縱 鍾17 a	濃 鍾11 c *	融 東11 a	
鐘 〃 b		釀 鍾11 a	溶 鍾6 b	
	崩 登4 a *	穰 〃 e	庸 〃 d	
松 鍾4 a *	繃 耕14 a		墉 〃 i	
嵩 東8 a	上二字収	從 鍾13 a	鎔 〃 j	
			蓉 〃 s	
公 東22 a *	陽	陰陽	榮 庚20 a	
躬 東10 c *	戎 東9 a	通 東29 a	上一字収	
恭 鍾21 a *	茸 鍾18 a	通 〃 b		
弓 東10 a			胸 鍾8 a	
功 東22 b	龍 鍾2 a *	同 東2 a	凶 〃 b	
工 〃 c	隆 東20 a	童 〃 c	兄 庚22 a	
蚣 〃 e	癢 〃 b	銅 〃 e	上一字収	
攻 冬5 a	窿 〃 d	桐 〃 f		
宮 東10 e *		峒 〃 g	(熊? 東12 a)	
供 鍾21 c	蒙 東23 a	筒 〃 k	(雄? 東12 b)	
肱 登10 a *	濛 〃 c	瞳 〃 l		
觥 庚7 b	朦 〃 f	潼 〃 r	風 東17 a	
上二字収	盲 庚3 a	擘 冬2 f	楓 〃 c	
	薨 耕3 a		豐 東18 a	
空 東21 a	萌 〃 d	冲 ?	封 鍾7 a	
恠 〃 g	上三字収	充 東19 a	峯 鍾16 a	
		衝 鍾5 a	鋒 〃 b	
翁 東27 a	籠 東24 a		蜂 〃 h	
泓 耕16 a	隴 〃 d	重 鍾12 a *	烽 〃 m	
上一字収	聾 〃 i	蟲 東4 a		
	隴 〃 n	鱗 鍾20 a	馮 東16 a	

逢 鍾15 a

縫 // b

烘 東32 a

蕘 登11 a

轟 耕13 a

上二字収

紅 東25 d

烘 ?

虹 // e

鴻 // g

宏 耕5 a

紘 // b

嶠 // e

橫 庚4 a *

弘 登9 a

上五字収

葱 東28 c *

匆 // a

聰 // f

聰 // i

叢 東26 a

蓬 東31 a

篷 // c

烹 庚14 c *

彭 庚8 a

棚 // f

鵬 登8 c

上四字収

上声

董 董1 a

懂 ?

孔 *董3 a

恐 腫11 a

憐 董2 g *

蠓 董2 a

猛 梗11 a

猛 // d

猛 // e

上三字収

桶 董5 b

統 宋3 a

總 董6 a

汞 董7 e

噴 董12 a

捧 *腫9 a

寵 腫2 a

簀 ?

隴 腫3 a

壠 // b

腫 *腫1 a

踵 // c *

種 // b

冗 *腫5 a

擁 腫4 a

勇 腫10 a

涌 // c

踊 // e

永 梗6 a

上一字収

聳 腫14 d

嘖 冬4 f

去声

送 送1 a

宋 宋1 a

鳳 送2 a

奉 腫8 a *

諷 送13 a

縫 用3 b

貢 送3 a

共 用4 a

供 用6 a

弄 送4 a

哢 // e *

磬 // d

棟 送5 a

凍 // b

棟 東1j/董1b *

洞 送10 a

動 董13 a

控 送6 a

空 // e *

控 // d

訟 *用2 c *

頌 // a

誦 // b

瓮 送8 a

黽 // e

痛 送11 a *

慟 送10 i

衆 送24 a *

重 用13 a *

中 送21 a *

種 用12 a *

仲 送12 a

夢 送15 b

孟 映9 a

上一字収

用 用1 a

詠 映12 a

瑩 徑11 b

上二字収

綜 *宋2 a

縱 用9 a

從 用16 b

粽 送7 b *

送 諄2 a

収

横 *映10 c

収

以上を通覧すると明らかなように、卓本は韻目のみならず各々の小韻や韻内の字の配列順に至るまで『広韻』の順序と大局的には一致するのである。それをつぶさに確認すると次のようになる：

まず、平声・陰について。各小韻はゴシックで示したように、『広韻』の東韻第1・3・8・10・21・27・31・35小韻、鍾韻第17小韻、および耕韻第14小韻の順に並んでいる。また同じ小韻に由来する字は小韻内の出現順も概ね『広韻』と一致する。例えば卓本第2小韻の冒頭の「中衷忠」は『広韻』の東韻第3小韻の第1・2・3字である。また、卓本では同一小韻に属すが『広韻』の別の小韻に由来する字も概ね『広韻』における出現順に沿って順次配列されている。例えば第2小韻ではまず「中衷忠」が『広韻』東韻第3小韻に由来し、次の「終」は東韻第5小韻に由来し、その次の「鍾鐘」は鍾韻第1小韻に由来する。このような成層構造は卓本が『広韻』に基づき順次字を拾って構成されたという成書過程を物語るであろう。その例外となる場合も散見するが、『広韻』来源の右肩に「*」を付けて表示しておいた。それらは第3小韻の「松嵩」、第7小韻の「宗稜駿」、第9小韻の「鬆慙」、第11小韻の「崩繻」のように、それぞれ「松宗鬆崩」の方が易識字であるため小韻の冒頭に繰り上げられたと考えられる場合が多い（以下でも同様）。

ここで「収」について論じておくと、従来から言われているように「収」が当該韻の主要な来源（この場合は東・冬・鍾韻）以外に由来する字に付されていることは明瞭である。そして、その出現位置は各小韻の末尾であり、外来字のみからなる小韻（ここでは「崩繻」の小韻）は当該韻の末尾に置かれている。ここからこれらの「外来字」は後で附加されたものであることが窺われる。ところで、寧繼福氏によると周本のように何も表示されていない方が本来の状態で

あり、卓本の側が後にそれらの来源の違いを見いだして「収」の注をほどしたのだという⁽¹⁴⁾。寧氏は卓本で「収」の注が付いている小韻を全て列挙し周本と比較しているが、それを見ると卓本では「収」の注がついている字はすべて例外なく小韻末尾に位置するが、周本では必ずしもそうではない。この状態からすると、卓本の方が本来の成書時の順位をとどめており、周本の方は増字したり字順を入れ換えたため小韻末に揃わなくなったと考えられ、「収」の注も「外来字」を初めに当該韻に収めた原編者に由来するものとすべきである。

次に、平声・陽について。各小韻は東韻第9・20・23・24小韻、冬韻第4小韻、鍾韻第11・13小韻の順に並んでいる。

平声・陰陽について。この場合、陰・陽でミニマル・ペアーをなす小韻が対になって並んでおり、『広韻』で陰または陽のいずれかの小韻が出現するとそこでその相手となる小韻も同時に配備したと考えられる順になっている。そこで、陰・陽の一对を一単位として配列順を見ると、東韻第2・4・11・(12)・16・25・26・31小韻の順に整然と並んでいることが分かる。ここで、「雄かつ/または熊」からなる小韻は東韻第12小韻に由来し、その前後の対が東韻第11・16小韻であることから推して正に場所を得ていることとなる。もし本来ここに「胸凶兄」の小韻しかなかったならば、それらは鍾韻第8小韻・庚韻第22小韻に由来し、ここに位置するのはおかしいことになる。「胸」の小韻の後に「雄かつ/または熊」からなる小韻が本来は存在していたと推定するのは卓本の体例に基づくものであったが、ここで更にそれを支持する証拠が見いだされたこととなる。

また、「同」の小韻の冒頭の8字「同童銅桐峒筒瞳潼」が『広韻』の出現順に完全に沿っていることも目ざましい事実である。周本は声符順に「同筒銅桐童童瞳瞳潼潼」としているが、これだと『広韻』の出現順との一致は乱れ、ここからしても卓本の順の方が本来的なものであることが分かる。

平声・陰陽の項の最後の対は原本に混乱がある。本来は「烹」の字を陰の小韻として立て「収」の注を付し、それに対する陽の小韻

として「蓬蓬彭棚鵬上三字収」を立てるべきであったが、「烹」を付け加える際にうっかりして陽の小韻に入れてしまったのであろう⁽¹⁵⁾。

上声においては小韻順にやや混乱があり、第2・7・9・11・12小韻は『広韻』の順とやや相前後している。このような小韻全体の位置が例外的なものは小韻第1字の『広韻』来源の左肩に「*」を付しておいた。それ以外はやはり董韻第1・2・5・6・7小韻、腫韻第2・3・4・14小韻の如く『広韻』における出現順に沿って並んでいる。

去声においてもいくつかの例外はあるものの、送韻第1・2・3・4・5・6・8・10・12・15小韻、用韻第1・9小韻の順に並んでいる。

以上のような『広韻』との出現順の対応関係は、卓本に就いて見るならばきわめて整然としていて一目瞭然であるが、周本では全く無秩序となっている。周本について、上と同様に各小韻内で『広韻』の順に照らして最も早く出現する字の小韻来源を記すと次のようになる：

平声・陰：東1・3・29・8・19，鍾10，東21・31・17・35・28，鍾17，東14・10・32，鍾8，東27，耕14，庚14。

平声・陽：東2・9・20・15・24，冬4，鍾11，東4・16・26・12・11・23・25・31，鍾13。

上声：董1，腫1，董3・5・7，腫3，？，腫15・14・13・4，董2・6，腫9・2・5，冬4，董12。

去声：送5・2・3・1・4・6，用2，送8・10・12，用9，送15，用1，映10，宋2，諍2，送25。

前節で周本と卓本の比較に基づき、卓本の小韻順が本来的であり周本がそれを改変したものと推定したが、ここにおいてそれを証する決定的な根拠が出てきたこととなる⁽¹⁶⁾。そして、このような卓本と『広韻』の小韻順・字順の一致は東鍾韻のみならず全書において遍ねく認められる。

さて、上では専ら『広韻』のみと比較を行なったわけだが、当時利用できたであろう先行韻書は他にもあるから、卓本と小韻順が一致する資料が他にも存在する可能性を考えてみる必要がある。その

うち、『五音集韻』『古今韻會舉要』『蒙古字韻』といった韻書は小韻を声母順に整然と配列しているから、まず候補から外される。次に『集韻』および宋元代に最も流布していた『礼部韻略』系の韻書についてだが、『集韻』は韻目こそ『広韻』と大差ないものの、既に韻内を同類の韻母および同調音点の声母ごとに区分して小韻順を大幅に入れ換えており、『礼部韻略』系の韻書もそれを襲っていて、卓本との小韻順の平行現象は認められない。すると宋元代の韻書で残されるのはやはり『広韻』しかない。そして、覃談韻由来の字が卓本・周本で侵尋韻の後の監咸韻に収められることからして『広韻』よりも前の切韻系韻書に拠ったのでもないことが窺われる⁽¹⁷⁾。

5. 卓本と周本の音韻体系上の齟齬

佐々木猛氏は「『中州楽府音韻類編』によって『中原音韻』に含まれる誤りを正しうるか」において次のように述べておられる：「江西高安の人・周德清は元の泰定元年（1324）に、河北燕山の人・卓從之の『中州楽府音韻類編』、或いはこれと同系統の本にもとづいて改編増補し、「起例」を附して、元曲製作のための指南書『中原音韻』を編んだ。周氏は「起例」の中で前者を「墨本（稿本）」、後者を「的本（定本）」と称して明確に区別している。この「墨本」が周氏自身の手に成ったものか否かは暫く問わないにしても、これを用いて「的本」、つまり今日通行する『中原音韻』の原本となったもの、をまとめる際に、周氏は思わぬ誤りを犯していたのではなからうか。更に、『中原音韻』には官話音系らしからぬ「なまり」が時折みられる。〔原注：たとえば、四斉微，平声陽の vei 音を表わす「26微」小韻に中古音が「喻四，脂A合」の「維惟」が収められていること，が挙げられる。南方音にはこのような現象があるが、『中州』にはこの小韻にこの二字は収められていない⁽¹⁸⁾。〕これは『中州楽府音韻類編』にはなく、この書が『中原音韻』よりもいわば純粋な資料であるという印象を与える一つの要因にもなっている。⁽¹⁹⁾該論文にはその具体的な例が多く取り上げられており、卓本と周本は厳密には同一の音韻体系に基づいたのではないことを

窺わせるのに充分である。即ち、佐々木氏自身は態度を保留されているけれども、周徳清は墨本の作者では有り得ずの本の増訂者に過ぎなかったのではないか。この節ではその可能性を更にいくつかの特徴に即して論じてみよう。

まず、止摂の舌歯音の反映について。『中原音韻』では舌上音は齊微韻に、齒上正歯音は支思韻に入るのが大勢であるが⁽²⁰⁾、周本には支思韻に「𦵏𦵏𦵏」という舌音字があり、齊微韻に「𦵏𦵏𦵏𦵏」という歯音字があつて例外を成している⁽²¹⁾。ところが、これらの字は卓本には見られず、すべて周徳清が増加したものと見られる。周徳清は自ら「起例」第21条で「依後項呼吸之法，庶無之・知不辨、王・楊不分及諸方語之病矣。」と述べ、更に「齊微」の項でも「知有之，痴有𦵏，恥有𦵏，世有市⁽²²⁾，智有志以上三声係与支絲分別。」の例を挙げて区別するよう注意を喚起しているのだが、自分で増字する際に誤りを犯しているところからすると、周徳清自身の方言ではこれらの対立は既に存在していなかったのかもしれない。

次に、効摂唇音1・2等の反映について。この問題については服部四郎博士が早く「元朝秘史蒙古語のoおよびõに終る音節を表はす漢字の支那語音の簡略ローマ字転写」⁽²³⁾において「趙〔蔭棠、引用者補〕氏が「褒」と「包」，「保」と「飽」，「抱」と「爆」などの唇音一等の字と二等の字との区別をpauとpauの区別と推定してゐるのは、已むを得ぬ所であらう。」とされ、その注において「この区別が口語音に実際にあったか否かは疑はしい。去声幫母の字の含まれてゐる群に既に一等と二等との合流が認められるが、他の唇音の字では、一等と二等の区別がないばかりでなく合流が確認される。蒙古字韻，韻略易通にもこれに当たる区別がない。恐らく，中原音韻における人工的要素の一例とみるべく，注意すべき事実である。」と述べておられる。

問題の三対に関し、佐々木猛氏は卓本においてはそれらが全て連続して配列されていることを指摘し、周徳清がそれらの間の空白を本来の空白と認めて一字のみからなる「褒」と「飽」をそれぞれ韻末に移したものと解釈された⁽²⁴⁾。

卓本では蕭豪韻は『広韻』の蕭宵肴豪韻の順に構成されており(相配する上・去声も同じ)、まず蕭韻由来の小韻が並んだ後に宵韻由来の小韻が続く、更に肴韻第2小韻由来の「交…」が来て、その後に問題の「包胞」(肴韻第8小韻由来)と「褒」(豪韻第10小韻由来)が続く、その後は肴韻第10小韻、肴韻第13小韻由来の小韻が来て、例外的な「凹」小韻を挟んで、豪韻由来の小韻が続くのである。すると、豪韻由来の「褒」が肴韻第8小韻と第10小韻の間に来るのは『広韻』との対応関係からすると例外的だということになる。一方、上声でも同様にして問題の「飽」(巧韻第3小韻由来)と「宝保堡保」(皓韻第15小韻由来)は巧韻第1小韻由来と巧韻第5小韻由来の小韻の間に現れ、皓韻由来小韻がこの位置に挟まれるのは例外的である。去声では卓本では「豹 爆瀑曝 抱報」となっており、そのうち「豹爆」は効韻第5小韻由来、「瀑曝」は号韻第9小韻由来、「抱」は皓韻第2小韻由来、「報」は号韻第10小韻由来であり、これらは効韻由来小韻が並ぶ箇所に現れていて、そこに号韻由来小韻が挟まれるのは例外的である。もしも以上三つの場合において、一等由来の字が既出の二等小韻と同音であるとして後に附加されたものであるならば卓本ではごくありふれたケースとなる。

さて、周本がこれらの小韻を区別するのは全く意図的なものである。先に引いた「起例」第21条の「蕭豪」の項に「包有褒、飽有保、爆有抱」が挙げられているからである。実は周徳清の出身地である江西省高安・老屋周家の方言では現代でもなお一等と二等の韻母の対立がほぼ保存されており、効摂にあっては一等 ou : 二等 au と発音される⁽²⁵⁾。だから周徳清にとっては問題の小韻を発音し分けることは難なくできた筈である。

卓本の前編者のつもりとしては問題の三対がそれぞれ同音であつたであろうことは、上で見たように小韻順から窺われる所である。それが卓本の段階で既に間に空白が入っているということは、周徳清が手を入れたからだと思われる。「起例」第21条に挙げられている三対のみが区別されている(但し去声の対は一方の小韻が一二等を混じていて不完全である)ことからしてもその疑いが濃厚である。

次に入声の処理について。『中原音韻』の入声の性質の問題は最も議論的になるところである。周徳清が「起例」第5条で「入声派入平上去三声者，以広其押韻，為作詞而設耳。然呼吸言語之間還有入声之別。」と述べるところからすると，入派三声は押韻しやすくするための措置に過ぎず，現実の言語ではまだ独立の入声が存在していたように思われる。しかし，ここで勘案せねばならないことは周徳清が江西人であったことで，周徳清の出身地の方言では入声が現存し，-p, -t, -k の別すら保存しているのである⁽²⁶⁾。すると，周徳清がそう言うのも当然のことである。

この問題に関連して佐々木猛氏が面白い観察をしておられる。即ち，周本は「〔入声作三声〕」の項については，本来舒声であった字を収める項に比較して，増加字の割合がかなり小さい。このことは，『中原音韻』「正語作詞起例」4に「平上去入四声，中原無入声，派入平上去三声，前輩佳作中間，備載明白，但未有以集之者，今撮其同声，或有未当，与我同志改而正諸」とある如く，周徳清自身が入声字の処理については自信のなさを表明していることを考え合わせると，大変興味深いものがある。』⁽²⁷⁾

ここで，周徳清が入声の処理を誤ったと考えられる例の一つ取り上げてみよう。宕江摄入声の反映は周本と卓本とでかなり異なっている。周本では宕江摄入声は蕭豪韻と歌戈韻に重出している。これは当時既に現代北京語の例えば「剥」の白話音 bāo : 文語音 bō の如き重層による両読現象が存在したことを物語るが⁽²⁸⁾，卓本では去声ではやはり重出しているものの，平・上声では蕭豪韻のみに収められている⁽²⁹⁾。さて，周本の蕭豪韻・入声作去声の欄には山攝由来の「末沫」の二字が含まれていて，これは音韻対応上問題がある。卓本・周本ともに -u 韻尾を持つに至る入声字の来源は低/後主母音で -k 韻尾で終わる通宕江摂に限られ，-t 韻尾に由来するものはこの二字以外にはない⁽³⁰⁾。「末沫」は卓本では歌戈韻のみに収められており，これは正規の音韻対応形である。さて，去声に限っては卓本でも宕江摄入声字が蕭豪韻と歌戈韻に重出し，両韻に収める字は大同小異である。そこで，周徳清が蕭豪韻の入声作去声の欄

を増補する際に卓本の歌戈韻の入声作去声の欄を参照し、「末沫」も他の宕江摂由来字と同様に両読現象を持つと類推して蕭豪韻にも重出させたのではないか。「末沫」が例外的な音韻変化を遂げたとするよりも、この方が有り得そうなことに見える。

いずれにせよ、佐々木氏の指摘する如く周本においては入声字の増補が少ないという点は動かぬ事実であり、まだ入声を保存していた方言の話者が増補した周本と、卓本における入声の存在いかんの問題は峻別する必要がある。

卓本には入声が舒声と同音になっていたことを示す徴証がある。それは尤侯韻上声の「肘箒竹収、入作去」と去声の「溜六留収、入作去」の二小韻である。前者の「去」は「上」の誤りであり、後者の「六」は「留」の後に位置すべきであるが、ここで入声字の「竹」と「六」が舒声字と同一小韻に収められていることは注目すべきである。尤侯韻・上去声では派入される入声字がそれぞれこの一字しかなかったため他の場合のように「入声作某声」の欄が立てられなかったものと見られるが、このように同一小韻に収め得るということは完全な同音であったことを意味する⁽³¹⁾。そしてここから推して他の「入声作某声」として別欄を立てられている入声字もし数量がまとまっていなければ舒声小韻と合併し得たものと考えられる。卓本は外来字に逐一「収」という注を付けているが（ただし時に写脱されている場合がある）、入声に関してはあまりにも分量が多く繁瑣なため「入声作某声」の欄を立てて一括して処理したのであろう。

元曲で入声字が舒声字と通押する現象は入声が舒声と近似音であったことは示すが、それらが完全な同音であったとは限らず、『中原音韻』に見られるような「入派三声」もそれだけならば全濁入声・清入声・次濁入声が陽平・上声・去声と同じトネームを持っていたが未だ声門閉鎖音韻尾を保っていて合流はしていなかったものとも考え得る⁽³²⁾。しかし、同一小韻に収められることはそれとはレベルが異なり、もはや合流していたことを疑う余地はない。

6. お わ り に

以上で論じきたったことをまとめると次のようになる。『中原音韻』は周德清が自序で称するように自ら元曲の初期の名家の実作に基づいて帰納して編んだものではない。それは元々は『広韻』に基づいて順次字を拾っていつて編成されたものであり、その様相は『中州楽府音韻類編』にほぼそのまま反映されている。周德清はそれに対して平声の「陰陽」類を「陰」と「陽」に分属させて解消し、字を増加し、小韻内の字順を声符順に並べ換え、一字小韻を韻末に降ろす、といった改訂作業を行なった。そして、周德清による増補・改訂部分と本体とでは音韻体系上のずれが見られるから、原本の編者は周德清では有り得ない。

『中州楽府音韻類編』には燕山・卓從之述とあるから、卓從之は原本の編者ではなく、祖述者に過ぎなかったであろう。また、現在見られる卓本には前節で効摂唇音1・2等の反映を検討した際に垣間みられたように、既に周德清の手が部分的に入っている如くである。それを示す徴憑が他にもある。佐々木猛「周德清は大都を見たか」⁽³³⁾は周德清が終始江西を活動舞台としており大都に赴いたことがないことを論ずるが、その一つの証拠として『中原音韻』には江西・景德鎮で製作する磁器の原料となる白色の土片を表す「不」という字が収められていることを挙げる。この字は通常の韻書・字書類には見えず、一字のみとはいえ『中原音韻』の地域特色を同定する有力な根拠となる。そして、この字は卓本に既に収められているのである。だから、現在見られる卓本は周德清が言うところの『中原音韻』墨本に由来するもので、周德清の手元にあった時期を経ているものと考えられる。卓本に存在する『広韻』との対応関係の例外的内、易識字を小韻冒頭に持って来たために生じたものの中には周德清の所為によるものが含まれているかもしれない。また、卓本には侵尋韻上声の「您」や「怎」のように『広韻』に見えない字がわずかながら含まれるが、そういった字も周德清が増加したものかもしれない。だが、大枠は原本の様貌をとどめているであろう。

いずれにせよ、周徳清は『中原音韻』において『広韻』にたびたび言及しているが、『中原音韻』の成書に果たした『広韻』の役割については絶えて触れることがない。周本の増補にあたって元曲の実作を参照することはあったのかもしれないが、そもそもの墨本の由来に関しては粉飾していると言わざるを得ない。或いは周徳清自身も墨本の編者と編集過程は知悉していなかったのかもしれない。

註

- (1) 周徳清の出生年は早く金井保三「中原音韻につきて」『東洋学報』3:3, 1913年, 409頁が世祖の至元十三四年頃(1276-7年)と推定していたが、近年になって寧繼福氏が『暇堂周氏宗譜』を見だし、生卒年が確定した。冀伏「周徳清生卒年与《中原音韻》初刻時間及版本」『吉林大学学报・社会科学版』1979年第2期, 98-99頁, 封三; 寧繼福『中原音韻表稿』吉林文史出版社, 1985年, 1-2頁, 335-338頁を参照。
- (2) 以下では基本的には訥菴本(1441年)『中原音韻』中華書局, 1978年に基づき、必要に応じて服部四郎・藤堂明保『中原音韻の研究・校本編』江南書院, 1958年によって諸本の状況を参照する。なお同校本に未収録の内藤湖南旧蔵本は現在武田科学振興財団・杏雨書屋に収蔵せられている(杏雨書屋編『新修恭仁山莊善本書影』1985年, 写真44-45頁, 解説25-26頁参照)。同本は阿部隆一「宋元版所在目録」『阿部隆一遺稿集』第1巻, 汲古書院, 1993年, 58頁によると現存の確認される唯一の元刊本である。ほか、熊克「跋明藍格鈔本殘卷《中原音韻》及《太和正音譜》」《社会科学戦線》編輯部編『古籍論叢』福建人民出版社, 1982年, 260-267頁は四川師範学院図書館蔵の『中原音韻』明代写本を紹介している。但し同本は「正語作詞起例」の過半を写すのみで、韻譜部分はない。
- (3) 日本語訳は佐々木猛「中原音韻序訳注」『均社論叢』6, 1978年, 41-48頁を参照。
- (4) 日本語訳は佐々木猛「『中原音韻』『正語作詞起例』訳注」『均社論叢』8, 1979年, 67-68頁を参照。
- (5) 「中原音韻研究」『国学季刊』3:3, 1932年, 439-446頁; 国学小叢書本, 1936年; 重印本, 上海, 商務印書館, 1956年。但し1936年・1956年単行本にはこの結論は全く非である旨の注が書き加えられている

- (25頁)。この論拠のうち、韻書は後に出たもののほど字数が多いとの所説は節略本の存在を度外視しているから一般論としては必ずしも成り立たない。なお、厲嚨桐「宋元之間北音平声転変之公例（中州楽府音韻類編之研究）」『東方雑誌』35：12，29-31頁，1938年は平声の「陰陽」につき趙蔭棠説を批判するが、かえって根拠のない説を提出している。
- (6) 「京劇中の幾箇音韻問題」もと1935年、『羅常培語言学論文選集』北京，中華書局，1963年，158頁。160頁所掲の元明以来の近世韻書の系譜図でも卓本は周本の下に置かれている。
- (7) 『燕京学報』31，1946年，68-70頁；『陸志韋近代漢語音韻論集』北京，商務印書館，1988年，31-33頁。
- (8) 1333年というのは『中原音韻』に序文を書いた虞集が退官して郷里に帰った年である。註1所引寧論文は1341年に刊行されたと推定する。
- (9) 『福岡大学人文論叢』12：4，1981年。
- (10) 『吉林大学社会科学学報』1982：3；註1所引書192-204頁。
- (11) 『均社論叢』10，1981年。
- (12) 卓本を校録したものには他に盧前校訂本；天英「元卓從之的中州楽府音韻類編」『劇学月刊』5：2，37-44頁，1935年；隋樹森校訂『朝野新声太平楽府』中華書局1958年，1987年所収のものがあるが，すべて底本は鉄琴銅劍樓旧蔵・北京図書館現蔵の明本である。
- (13) 寧繼福氏は「“的本”即底本，才是他的手稿。」と言う（註10所引論文22頁，註1所引書199頁）が、『新校元刊雜劇三十種』（北京，中華書局，1980年）の題目には「古杭新刊の本関大王單刀会」の如く「的本」を冠するものが多くあり，しかも例外なく「新刊」と共に称せられているから「的本」とは「的確な，しっかりしたテキスト，即ち定本」という意味だとすべきである。
- (14) 註10所引論文18-20頁；註1所引書192-194頁。
- (15) この点は註12所引の天英論文以来つとに指摘されている。
- (16) 仮に周本の小韻順の方が本来的なもので卓本がそれを『広韻』の出現順に並べ換えたと仮定しても，それによって得られる実的なメリットは全く考えられない。
- (17) 現存する切韻唐五代諸本では覃談韻は麻韻の後・陽韻の前に置かれ（相配する仄声も同じ，以下同様），『広韻』のみがそれらを侵韻の後・塩韻の前に置く（上田正『切韻殘卷諸本補正』東京大学東洋文化研究所東洋学文献センター叢刊第19輯，1973年，64頁）。卓本では『広韻』

においてある韻が出現するとそこで韻部を立て、それと同音のものはその位置に繰り上げたと見られる。例えば『中原音韻』江陽韻は『広韻』江韻所属小韻をまず据えて、その下に順次陽韻・唐韻字を附加していったことが観察される。すると、もし卓本が『広韻』以前の切韻系韻書に基づいていたならば監咸韻は車連韻の後・庚青韻の前にあってもよい筈であるが実際にはそうになってはいない。

- (18) 但し劉勳寧『《中原音韻》“微微維惟”解』『語言学論叢』15, 1988年は北方にもこのような現象があることを報ずる。
- (19) 註9所引論文, 1536-7頁。
- (20) 藤堂明保『中国語音韻論』光生館, 1980年, 112頁参照(ただし旧版にはこの記述はない)。なおこのような反映は『翻訳老乞大・朴通事』左側音(即ち『洪武正韻訳訓』および『四声通考』俗音)・右側音でも同様であり, 止摂舌上音は左側音 iz : 右側音 i となっており, 止摂正歯音は左側音 yz : 右側音 ɶ となっている(遠藤光暁『《翻訳老乞大・朴通事》漢字注音索引』好文出版, 1990年, 47-59頁参照)。
- (21) この現象の存在を佐々木猛氏の教示により知り得た。記して謝意を表する。
- (22) 「世」は蟹摂字であり正歯音でも齊微韻に入る。
- (23) 橋本博士遷曆記念会『国語学論集』岩波書店, 1944年; 『服部四郎論文集2 アルタイ諸言語の研究II』三省堂, 1987年。
- (24) 註9所引論文, 1530-1頁。
- (25) 顔森『高安(老屋周家)方言的語音系統』中国社会科学院研究生院修士論文, 1981年, 41頁; 『方言』1981年第2期所載の同名の論文の同音字表からもそれは分かる。
- (26) 註25参照。ただし周徳清は「起例」第22条で『広韻』を批判しつつ「入声以平声次第調之, 互有可調之音。且以開口陌以唐内盲至徳以登五韻[引用者注: 「唐内」の意味不明, また通行本の「広韻」では陌から徳までは六韻である], 閉口緝以侵至乏以凡九韻, 逐一字調平上去入, 必須極力念之, 悉如今之南宋戲文唱念声腔。」と言っているから, 努力しないと-k と-p の発音ができなかったようである。
- (27) 註9所引論文, 1525頁, 注10。
- (28) この現象は元曲の実作にも反映している。魯国堯『白樸曲韻与《中原音韻》』『《中原音韻》新論』北京大学出版社, 1991年, 138頁には蕭豪韻・歌戈韻に重出する例; 廖均英「関漢卿戲曲的用韻」『中国語文』1963: 4, 272-4頁には尤侯韻・魚模韻に重出する例などが見える。註23所引論文はこの現象につき一字面読説を否定し, 一種の発音が場合に

より蕭豪韻ないし歌戈韻に類似したため両属されたとする説を提出しているが、そのような過程は該方言の音韻体系を過不足なく掌握していない外国人ないしよそ者が音声的類似によって表記をなす場合には起こり得ようが、母語話者ないし該音韻体系を既に掌握した者が音韻論的に対立のない音節（即ち「字」）を別の音類に両属させることはなからう。

- (29) 『蒙古字韻』でも宕江摂入声は蕭韻のみに収められ、これが当時の北方官話の固有層だったであろう。
- (30) この点は楊耐思『中原音韻音系』中国社会科学出版社、1981年、53頁および139頁注1で既に指摘されている。
- (31) この点は既に忌浮「《中原音韻》無入声内証」『音韻学研究』1、1984年および注1所引書169-170頁の例証八として挙げられている。ほか、その例証七、即ち周本で支思韻の入声作上声の「洪瑟音史」と「塞音死」の二小韻において舒声字で直音注がついていることも、それらが同音であったことを示すものとして認めてよい。
- (32) このような考えは、服部四郎『元朝秘史の蒙古語を表はす漢字の研究』龍文書局、1946年の巻末の附録第一・音訳漢字順位表の表記に窺え、服部四郎「日本祖語について・10」『言語』1978年12号ではそれが明確に述べられている。また平山久雄「『中原音韻』入派三声の音韻史的背景」『東洋文化』58、1978年はそれを支持するいくつかの縮約語例を論じている。このような状態は、『中原音韻』の段階が正にそうであったかどうかは別として、かつて北方官話において存在したと想定せねばならない。
- (33) 『大阪外国語大学論集』11、1994年。